



## ⑨ G20外交の背景

### 中国の「異質性」

コラムを書くには厳しいタイミングである。今日現在、G20はまだ始まっていない。しかしこの原稿が掲載されるころには、とっくに終わっている。

米中貿易戦争の行方は気になるところだが、私に予知能力はない。無理なコメントは諦め、今回は長期的な話で逃げることにしよう。

中国は大国になる、と昔から多くの人たちが予想してきた。しかし、中国がどのような大国になるのか、それによって世界がどう変化するのかについて、人々の見解はなかなか定まらなかった。中国は西側先進国と違って徳の高い対外政策を行う、と主張する中国人がいれば、その中華思想に基づく膨張主義で、アジアは受難の時代を迎える、という外国人もいた。

ただしこの数年、西側から見た中国問題の性質はかなり絞られてきた。米中貿易戦争でアメリカが強調するのは、表面的には市場経済を奨励しながら、実際には権威主義的なやり方で国内社会を統制し続ける中国の「異質性」である。米国が1990年代から辛抱強く続けた「関与政策」は、中国の国内体制を改善するどころか、その「異質性」をさらに強化してしまった、と考えられている。

### 繁殖するキメラ

ギリシャ神話にキメラという怪物がいる。ライオン

と山羊と蛇とを組み合わせた姿をしており、ときに火を吹いて万物を燃やす。政治的に一党独裁体制を堅持しながら、経済的に自由貿易の推進をアピールする中国は、西側諸国にとってはまさにこのキメラだ。西側では政治的民主主義と経済的自由主義がひとつのパッケージと考えられており、中国の存在は理論的に「不可能」。仮に遺伝子組み換えでそのような生物が一時的に誕生したとしても、それが生き続け、さらに繁殖するなど到底あり得ない。

しかし、最近はいくわからなくなってきた。筆者の中央アジアでの調査では、政府関係者が中国との経済協力は「とてもやりやすい」と語っていた。政府が国家経済に対して強い統制力を持つ国々では、指導者同士の話し合いをベースに官民の経済協力を進める中国式のやり方は効率がよいのだそう。同様に、経済的資源が特定のエリアに集中しがちなアフリカでも、中国との協力は自分たちの国家建設に有効と高い評価を得ている。

非・西側式国家である中国の成功は、たしかに世界的な強権主義の復活と軌を一にしている。トルコのエルドアン大統領も、インドのモディ首相も、国内では反対派を押さえ込みながら辣腕（らつわ

ん）を奮っている。世界の民主主義の勢いは衰えている。キメラは繁殖し始めているようだ。

### 根源的な争点

中国の世界的な影響力の拡大は、楽観視できる側面ばかりではない。ウズベキスタンでは昨年、フェイスブックが急に見られなくなった。反テロ対策の名目で、中国からネット統制技術が導入された可能性がある。中国が国内に張り巡らすAI監視技術が、世界の強権主義者たちに広まったらどうなるのか。「一带一路」の連結性拡大の名目で、中国はすでに5Gや「北斗」衛星技術を世界に広めている。それらは中国が世界から情報を吸い上げる道具になるのではないかと。

しかし、西側諸国のこうした懸念は、中国人にはなかなか理解されない。中国では昔から、皇帝の強い権威の下で、比較的自由に商業が発展してきた。西側にとってのキメラは、中国人にとってはごく自然な存在で、まったく問題にならない。中国人から見れば、西側諸国は世界を理解するようになってようやく、東方の「生きた化石」を再発見したにすぎない。

両者の対立は、きわめて根源的なものである。それは、人類社会のあり方に対する理解の相違であり、大国間の単なる覇権競争の域を超えている。その意味で古典的大国・中国の台頭は、フランス革命の中から出現したナポレオンが、勃興する同国のナショナリズムを背景に、ヨーロッパ統一を目指して諸国の絶対王政に挑戦したのと同程度の破壊的なインパクトがある。われわれはおそらく、きわめて興味深い時代の生き証人なのだ。

（益尾知佐子・九州大学比較社会文化研究院准教授）

# 中国はキメラか生きた化石か